

ORIGINAL ARTICLE

抑うつと怒りとの関連

Relationship between depression and anger

三橋 識子¹⁾ (Noriko MITSUHASHI), 田上 恭子²⁾ (Kyoko TAGAMI)

1) 弘前大学大学院教育学研究科

〒036-8560 青森県弘前市文京町1

mhnk72@yahoo.co.jp

2) 弘前大学教育学部

〒036-8560 青森県弘前市文京町1

tagamik@cc.hirosaki-u.ac.jp

ABSTRACT

本研究の目的は、抑うつは攻撃性の自己への向けかえによって生じるという精神分析理論に基づき、怒りを内に向けることが抑うつをもたらすのかどうかを検討することであった。167名の大学生が抑うつを測定する SDS と怒りを測定する STAXI を含む質問紙に回答した。なお STAXI は、状態-特性怒り尺度 (“状態怒り”, “特性怒り”) と怒り表出尺度 (“怒り表出” “怒り抑制” “怒り制御”) から構成される。階層的重回帰分析の結果、STAXI の怒りの表出傾向のうち “怒り抑制” のみが抑うつに影響を及ぼしていたことが示された。このことから、怒りを抑制することによって抑うつが生じたり持続されたりすることが示唆され、精神分析的理論を支持する可能性がうかがわれた。抑うつ予防には怒りを適切に表現することが重要であるということについて論じる。

The psychoanalytic theory that depression arises from turning aggression towards the self was examined by investigating the possibility that depression is caused by inwardly focusing anger. University students ($n=167$) completed questionnaires that included the Self-Rating Depression Scale (SDS) and the State-Trait Anger Expression Inventory (STAXI), which respectively measures depression and anger. STAXI consists of the State-Trait Anger Scale (“State Anger” and “Trait Anger”) and the Anger Expression Scale (“Anger-Out”, “Anger-In”, and “Anger-Control”). Results of hierarchical multiple linear regression analysis indicated that the Anger-In measure of STAXI affected depression only in the relation to anger expression. This result suggests that development and the maintenance of depression might arise from anger-in (focusing anger inwardly, or anger

Received
August 20, 2012

Accepted
October 26, 2012

Published
October 31, 2012

suppression), which supported the psychoanalytic theory. We have discussed the importance of appropriately expressing anger as a method of preventing depression

<Key-words>

抑うつ, 怒り, 精神分析理論

depression, anger, psychoanalytic theory

Asian J Human Services, 2012, 3:77-86. © 2012 Asian Society of Human Services

I. 問題と目的

1. 現代におけるうつ病の問題

近年, うつ病者の増加が指摘されており, 実際に厚生労働省が3年ごとに全国の医療施設に対して行っている2009年度の「患者調査」(厚生労働省, 2010)では, 平成8年には43.3万人だったうつ病等の気分障害の総患者数は, 平成20年には104.1万人と12年間で2.4倍に増加していることが示されている。うつ病による休職者数の増加やうつ病を原因とする自殺も問題となっており, 病気と診断された個人だけでなく, その周囲の人々や社会, 経済に与える影響も懸念され, 早期の予防が望まれる。また, これまでの一般的なうつ病の症状とは異なり, 自責感が強くなく, 他人を責めるという特徴をもつ非定型うつ病や新型うつ病の存在, うつ病の経過の中でアンガーアタックと呼ばれる突発的でコントロールしきれない怒りが生じるケースも注目されてきている(衛藤・岡村・宮城, 2010; Painury, Sharan, & Matto, 2005)。衛藤他(2010)によると, 非定型うつ病では, 自責感が強くなく他人のせいにするという特徴の他に, 気分の状態や睡眠, 食欲の傾向がこれまでのうつ病と異なり, 若い世代に目立つとされ, 薬物療法以上にカウンセリングや心理療法などの心理学的援助が重要であるとされている。新型うつ病は, さらにタイプが分けられ, タイプごとに自己中心的であったり, イライラを伴ったりするなどの症状がみられ, 抗うつ薬の効果が期待できないとされている。またアンガーアタックについて Painury et al.(2005)は, 1990年に初めて記述されたこと, うつ病の経過の中での突発的でコントロールできない激しい怒りを特徴としていること, その発作の後に罪悪感が続くこと, 抗うつ薬で改善するためうつ病における怒りの特別な形であるとされることなどを示している。アンガーアタックをもつ患者は, アンガーアタックのない患者よりも抑うつや絶望感, 不安や敵意, 苦悩を高く感じていることが報告され, 依存性, 回避性パーソナリティ障害や自己愛性, 境界性, 反社会性パーソナリティ障害の基準を満たしやすいなどの特徴が示されている。これに限らず, 抑うつ症状を呈するものが攻撃性を持ちあわせることは, 対人関係の問題や衝動的な自殺との関連が懸念され, その予後は必ずしも良くないとされる(Painury et al., 2005; Moreno, Selby, Huhrihan, & Laver, 1994)。このように近年の臨床事例ではうつ病における攻撃性の高さが注目されており, 抑うつと攻撃性の関連について検討を重ねていくことは意義あるものと考えられる。

Received
August 20, 2012

Accepted
October 26, 2012

Published
October 31, 2012

2. 抑うつと攻撃性に関する理論と実証研究

抑うつと攻撃性の関連についての検討は、抑うつは大切な他者に向かうはずだった攻撃性が自己に向け変えられたものであるという精神分析理論に始まる。Arieti&Bemporad (1978 水上・横山・平井訳 1989)によると、S.Freudは、患者の臨床観察から、メランコリーと悲哀を比較してうつ病における自責感について述べ、うつ病者の喪失が内面的で無意識的なものであり、喪失における内的感覚を説明するものとして、うつ病者のひどく不当化した自責感を挙げている。その自責感は、実は自分自身ではなく、自分自身の自我に移された愛の対象に向けられたものであり、もし攻撃性が外部に向けて表現されなければそれは自己に向かうと考えられている。すなわち、うつ病者の自責感というのは、対象喪失の結果、対象に向けた攻撃性が自己に向き変わったものであるといえる。抑うつと攻撃性との関連に関する実証研究は、このような攻撃性の自己への向け変えという観点から行われているものが多い。

例えば、Moreno et al. (1994)は抑うつと敵意(hostility)との関連について、敵意を怒り(anger)のような感情(affects)の側面、憤り(resentment)のような態度(attitudes)の側面、攻撃(aggression)や暴力(violence)のような行動(behaviors)の側面などから包括的に捉え、検討している。結果、自己批判や罪悪感、内罰性のような内に向けられる敵意の方が抑うつとの相関が高かったものの、言語や攻撃行動、外罰性のような外に向けられる敵意も抑うつと正の相関があり、抑うつが高い者は敵意の各側面も含めて全体的に敵意が高いことを示している。また、Riley, Treiber, & Woods(1989)は、敵意(hostility)を怒りやすい態度傾向とし、怒り(anger)を感情の要素であるとして敵意と怒りを分け、敵意や怒りの経験の頻度と怒りの表出傾向に注目してうつ病者と正常者を比較している。結果、抑うつと敵意・怒りの間にはそれぞれ正の相関がみられ、うつ病者は敵意や怒りを正常者よりも有意に多く感じているものの、怒りを表出せずに抑制する傾向があることが示されている。

うつ病者に限らず大学生を対象とした研究として、上野・丹野・石垣(2009)は、物理的な攻撃行動や言語的な攻撃のような行動的側面をさす表出性攻撃と、怒りの喚起されやすさとしての短気や他者への否定的な信念や態度としての敵意のような情動的側面をさす不表出性攻撃の2側面から攻撃性を捉えて、抑うつとの間に関連がみられるか、どちらと関連が強いのかについて検討している。結果、健常大学生では、抑うつが高い人は全般的にやや攻撃性が高く、抑うつと表出性攻撃(言語・行動)よりも不表出性攻撃(短気・敵意)が強く関連していることが示されている。また、鈴木・安齊(1999)は、P-Fスタディの標準法と質疑法を用いて標準法によって外側に現れる外面的攻撃性と質疑法によって現される内面的攻撃性を測定した結果、外的反応では自責固執反応が多かったものの内的反応では反応数が少なく、他責や他責逡巡反応が多かったことから、抑うつ者は表面上は罪悪感を感じ、自ら問題を解決しようとしているように見えるが、内面では不平不満を抱いているという特徴が示されている。

以上のように、先行研究からは抑うつが強い人は感情・態度・行動含めて全般的に攻撃性が高いことや、行動的側面よりも情動的側面の攻撃性である敵意や短気との関連が強いこと、うつ病患者は健常者に比べ、怒りを抑制しやすいこと、抑うつ者は表面上は罪悪感を感じ、自ら問題を解決しようとしているように見えるが、内面では不平不満を抱いていることなどが示されてきている。これらの実証研究の結果と精神分析理論との関連については、たとえば Riley et al. (1989)は、怒りの増加と怒りの抑制が抑うつを引き起こしているかもしれないと考察し、抑うつは怒りの向き変えによるという精神力動仮説と関連することを示唆してい

る。すなわち、怒りの自己への向き変えについては怒りの抑制に現れると考えられており、実証研究においては怒りの抑制という測度から捉えられているといえる。本研究でも、このように怒りの抑制は自己への向き変えと関連するという仮説に基づき検討する。

3. 本研究における攻撃性と怒りについて

抑うつと攻撃性の高さについては全般的には正の相関があることが示されており、抑うつ者の攻撃性の特徴についても研究がすすめられているが、細かい部分では結果は一貫していない。Moreno et al.(1994)も指摘しているが、先行研究において抑うつとの関連で測定されている攻撃性概念は多様であり、その多様性や曖昧さがひとつの問題であると考えられる。そこで、本節では攻撃性概念について整理する。

攻撃とはほかの個体に対して危害を加えようと意図された行動であり、攻撃性とは攻撃を起こす、認知、情動、動機づけ、パーソナリティなどの内的過程であり、認知や情動などの内的過程を含み広く定義される(大淵, 1999)。Moreno et al.(1994)が hostility を包括的に捉えているのと同様に、山崎・坂井・曾我・大芦・島井・大竹(2001)は、攻撃性(aggresiveness)を感情面としての怒り(anger)、認知面としての敵意(hostility)、行動面としての攻撃(aggression)のように細分化し、それらを総称して攻撃性としている。このように細分化されることによっていわゆる攻撃性のどの部分が抑うつと関連があるのかを検討できる。本研究では山崎ら(2001)の定義にしたがって、感情面としての怒り、認知面としての敵意、行動面としての攻撃として攻撃性を捉えることとする。

前節で概観した抑うつと攻撃性の関連についての実証研究からは、抑うつが行動的側面の攻撃性よりも認知面や感情面の攻撃性である敵意や怒りとの関連が強いことが示されている。近年は、アンガーアタックと呼ばれる抑うつ者の怒りの問題や、怒りを抑制しやすいというような怒りの表出傾向も注目されていることも踏まえ、本研究では攻撃性の中でも怒りとその抑制に注目し抑うつとの関連を検討する。

4. 本研究の目的

前述のように、精神分析理論では、抑うつは大切な他者に向かうはずだった攻撃性が自己に向け変えられたものであると考えられている。本研究ではこの理論及び Riley et al. (1989)の見解にもとづき、攻撃性の自己への向け変えは怒りの抑制に現れると仮定し、抑うつと怒りの抑制との関連を明らかにすることで、抑うつと怒りの精神分析理論を実証的に検討することを目的とする。

なお、怒り及び怒りの抑制の測定には、Spielberger によって作成された State-Trait Anger Expression Inventory(以下 STAXI)の鈴木・春木(1994)による日本語版を用いることとする。STAXI は、状態-特性怒りを測定する State-Trait Anger Scale(以下 STAS)と、感じられた怒りがどの程度外へ表現されたり、抑制されたりしているのか、怒りの表出の方向について測定する Anger Expression Scale(以下 AX)の 2 つの尺度を合わせたものである。STAS は情動状態としての怒りの強さを測定する「状態怒り(State Anger)」とパーソナリティ特性としての怒りやすさの個人差を測定する「特性怒り(Trait Anger)」からなる。AX は怒りを他の人や周囲の対象に向ける「怒りの表出(Anger-Out)」、怒りを表現することを抑えたり、怒りを心の中に抱いたりする「怒りの抑制(Anger-In)」、怒りを抑制しようとする「怒りの制御(Anger-

Control)」の3つからなる。このAX尺度の中の「怒り抑制」に着目し、抑うつとの関連が認められるかどうかを検討する。

II. 方法

1. 調査対象者

大学生 177 名を対象に質問紙調査を実施した。そのうち、記入漏れや記入ミスのあった回答を除いた有効回答者 167 名（男性 51 名、女性 116 名、平均年齢 20.45 歳±1.05 歳）を分析対象とした。有効回答率は 94.35%であった。

2. 手続き

質問紙は、一部は講義時間を利用して配布し持ち帰って記入してもらった後、翌週の講義後に回収し、一部は個別に質問紙を配布し、その場で記入して回収するか後日回収した。

3. 質問紙の構成

(1) 怒り

鈴木・春木(1994)による STAXI 日本語版(44 項目)を用いた。情動状態としての怒りの強さを測定する「状態怒り」10 項目、パーソナリティ特性としての怒りやすさの個人差を測定する「特性怒り」10 項目、怒りを他人や周囲のものに対して向ける「怒りの表出」、怒りを内にためる「怒りの抑制」、怒りが外に出るのを抑えようとする「怒りの制御」の AX 尺度 24 項目からなる。回答は「まったくあてはまらない(1)」から「とてもよくあてはまる(4)」の 4 件法により評定を求めた。

(2) 抑うつ

自己評定式抑うつ性尺度 Self-rating Depression Scale (以下 SDS とする) の日本語版(福田・小林, 1973)を用いた。20 項目からなる尺度であり、得点が高いほど抑うつが高いことを意味する。回答は「ないかたまに(1)」から「ほとんどいつも(4)」の 4 段階で評定を求めた。

III. 結果

1. 各尺度の基礎統計量と相関係数

各尺度ごとに合計点を算出し、それぞれの平均値と標準偏差、相関係数を算出した(表 1)。相関分析の結果、抑うつと状態怒りの間、抑うつと特性怒りの間には中程度の正の相関が認められた(それぞれ $r=.41$, $r=.33$, $p<.001$)。また、抑うつと怒り抑制の間には中程度の正の相関がみられた($r=.31$, $p<.001$)。

表1 各尺度の平均値と標準偏差, 変数間の相関係数

	2	3	4	5	6	平均値	SD	項目数
1 抑うつ STAXI	.41***	.33***	.12	.31***	-.08	43.02	8.12	20
2 状態怒り	—	.35***	.32***	.11	-.16*	14.17	5.41	10
3 特性怒り		—	.66***	.05	-.47***	21.41	5.87	10
4 怒り表出			—	-.08	-.41***	18.69	4.30	9
5 怒り抑制				—	.41***	20.46	4.17	8
6 怒り制御					—	17.58	4.11	7

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

2. 階層的重回帰分析

怒りの高さを一定にした上で, 怒りの表出傾向が抑うつにどのような影響を与えているのかを階層的重回帰分析により検討した(表2)。

投入方法は, 抑うつを目的変数として, 第1ステップで状態・特性怒りを説明変数として投入し, 第2ステップで怒りの表出傾向(表出・抑制・制御)を投入した。1回目で怒りを統制することにより, 2回目では怒りの表出傾向がどのように抑うつに影響を及ぼしているかが検討できる。また, ステップにおける決定係数の増加は, 投入された変数が抑うつをどれくらい説明するかを表す。結果, 第1ステップにおける重決定係数は有意であり($R^2=.21$, $p<.001$), 怒りが高くなると抑うつも高くなることが示された。第2ステップで怒りの表出傾向を投入したところ, 重決定係数には有意な増分がみられ($\Delta R^2=.09$, $p<.001$), 怒り表出と怒り抑制の標準偏回帰係数が有意になった(それぞれ $\beta=-.19$, $p<.05$, $\beta=.28$, $p<.001$)。このことから, 怒りを表出することによって抑うつが低くなること, 怒りを抑制することによって抑うつが高くなることが示された。

表2 抑うつを目的変数とした階層的重回帰分析の結果

ステップ	投入された変数	β	R^2	ΔR^2	F値変化量
1	怒り		.21***	.21***	21.74***
	状態怒り	.34***			
	特性怒り	.22**			
2	怒り表出傾向		.30***	.09***	7.00***
	怒り表出	-.19*			
	怒り抑制	.28***			
	怒り制御	.08			

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$ Received
August 20, 2012Accepted
October 26, 2012Published
October 31, 2012

IV. 考察

本研究では、精神分析理論をもとに抑うつと怒りの抑制との関連について検討した。結果から、抑うつが高い者は、状態、特性に関わらず怒りが高いこと、また怒りの表出が低く、抑制が高いことが示された。以上の結果から、怒りを感じていても表出せず、内にためることで抑うつが生じる、もしくは強まる可能性が示唆される。このことは、攻撃性が対象に適切に向けられず、自己に向き変えられると抑うつが生じるという精神分析理論の支持につながるものと考えられるのではないだろうか。

ただし、怒りの抑制と攻撃性の自己への向け変えは同様であるとは必ずしも言えない可能性もあることを述べておきたい。先行研究においても、攻撃性の自己への向け変えによって抑うつが生じると言えるのかについて議論がなされてきている。例えば Moreno et al.(1994) は、自己批判や罪悪感、内罰性が自己へ向けられた敵意であり、言語や攻撃行動が外に向けられた敵意であるとした。しかし、抑うつ者は敵意が自己だけではなく外に向けられたものとも相関が高いという結果から、精神分析理論は支持されなかったとしている。精神分析理論には無意識の考え方が根底にあると考えられるため、内面化された対象を特定したり、その対象に攻撃性が向けられているかどうかを検討することは難しく、自己評定式の質問紙によって攻撃性を測定するだけでは方法論的に限界があるだろう。また、Riley et al.(1989)でも述べられているように、怒りの抑制(suppression)を扱うか怒りの抑圧(repression)を扱うかの議論もある。このように、どういった状態を攻撃性が自己へ向かった状態とするかによって結果の捉え方は異なるものと考えられ、精神分析理論が実証されたかどうかは安易には結論づけられないものの、本研究の結果からは少なくとも、怒りを感じているもののその怒りを内にためることが抑うつにつながる可能性は示唆されたと考えられる。

攻撃性が高いものの内にためる傾向があるというのは、鈴木・安齋(1999)で抑うつ者の攻撃性の特徴として示されたように、表面上は表出しないものの内的には他責的であることと類似した状態であると考えられる。Spielberger, Krasner & Solomon(1988)は、STAXIの怒り抑制得点が高い者は絶望感や抑うつを長引かせやすいことを述べているが、抑うつ者が怒りを適切に表出せずためこむことは、後の抑うつや怒りの高さに影響を与え、アンダーアタックのような突発的な怒りの表出をもたらすことにもつながるかもしれない。また、うつ病者の攻撃性の存在については必ずしも良い予後兆候ではなく、外部への注意を示す深刻な状況も示唆するため、うつ病者の攻撃性の表現は特に禁忌であるともされている(Moreno et al.,1994)。以上より、抑うつ重症度が増す前にそのような攻撃性に早期に対処できることが望ましいと考えられよう。今後は怒りを適切に表現するための方法について検討を重ねることが必要であり、怒りの適切な表現のための介入もうつ病治療においては視野に入れる必要があると考えられる。

現在、怒りの適切な表現方法の一つに、さわやかな自己表現として知られるアサーションがある(平木,2009)。怒りを表出することで抑うつが低減する可能性が本研究の結果から示唆されたことから、怒りを適切に表現することで抑うつが予防できる可能性も考えられる。すなわち、攻撃的な自己表現でもなく、非主張的な自己表現でもなく、アサーティブな自己表現を心がけることが、怒りを内にためこまないという意味で抑うつ予防にもつながるかもしれない。アサーティブな言動には、ものの見方、考え方が影響しており(平木,2009)、要す

るに認知が影響していると考えられる。非合理的な認知を合理的なものに変えることにより、アサーティブな考え方、ひいてはアサーティブな自己表現へとつながるものと考えられる。

アサーション・トレーニングに限らず、認知行動療法の有効性も示されている(金築・金築・根建,2008)。金築他(2008)では、大学生を対象に、怒りの表出の高低群と怒りの抑制群の高低群に分け、認知行動療法介入群と統制群の比較を行った。結果、認知行動療法の介入をした群において、特性的な怒りの低減が確認されていた。また、怒りの対処スタイルによって効果は異なり、怒りの抑制が高い群では介入を行うことで怒りを抑制することに対する肯定的な意味づけが弱まり、結果的に怒りの抑制の減少をもたらしたと考えられている。一方で、怒りの表出が高い群は介入を行うことで特性的な怒りは低減されたが、怒りの認知的側面における変容の大きさは怒りの抑制高群と比べて小さかった。具体的な介入として、認知行動療法群には怒りに関する心理教育のほかに、自身の怒りの行動的反応における利点と不利な点の話し合いを行うなどの認知的側面への焦点化や怒り喚起場面に対応するためのイメージ・リハーサル、ホーム・ワークとしてセルフ・モニタリングが行われていた。認知行動的アプローチにより、怒りをいかに表現するかだけでなく、普段の怒りの感じやすさ自体を低減させることも有効な対処法と考えられるだろう。

その他に、湯川(2008)は、まだ発展途上ではあるが、怒り感情を筆記することにより、自分自身が抱えている気持ちを客観的にみることができるようになり、怒りの感情を調整し受容する制御力が強まる可能性についても言及している。ただし、抑うつ傾向の高い人には、筆記は効かないばかりか症状を悪化させる可能性が指摘されているという見解もあり、消沈的な感情の場合には、筆記は必ずしも効果的と言えないことが述べられている。このことから、筆記法も怒りの表現の際に有効なアプローチのひとつと考えられるが、どういった対象を相手にするかによって対処法を考慮する必要があるとも考える。

以上のように、怒りを適切に表現する方法を身につけたり、怒り自体を低減するようなアプローチを行うことによって、ひいては抑うつ予防につながる可能性があると考えられる。今後は、抑うつ問題を扱う場合に、怒りの表出方法や怒りへの対処法と関連させて検討することも必要であろう。そのためにも、抑うつと怒りにはどのような関連があり、何によって導かれるのかその関係性について検討することは意義があることと考える。

今後の研究上の課題としては次の3点が考えられる。第一に、抑うつ者は非抑うつ者と比較して、配偶者や子どもを含めた近親の家族に対しては怒りを表出するという知見もある(Painury,et al.,2005)。表出の仕方によっても適切か、不適切かが分かると考えられるため、どんな状況の場合に怒りを表出、抑制する傾向にあるのかなど、表出の仕方や状況などを考慮に入れ、今後研究していく必要があるだろう。第二に、結果の一般化のためには変数間の関連を検討するだけでなく、実際に事例的な検討を行い、本研究で得られたような結果を個にあてはめることができるか検討する必要があるだろう。第三に、本研究では対象者を健常者の中で抑うつ症状をもついわゆる軽度抑うつ者としたため、重度の抑うつ者に対してもこの結果が述べられるのか、大学生のみでなく一般の人を対象とした場合にも同様の結果が得られるのかについて検討する必要があると考えられる。

最後に、前述の通り、今後抑うつ問題を考える際に怒りに着目することはその理解においても援助においても有用であり意義あることと考えられる。そのためにも、抑うつと怒りにはどのような関連があり、何がその関係性に関与しているのか実証研究を重ね、明らかに

していくことが望まれる。

付記

本研究を進めるにあたり、お忙しい中ご指導・ご助言下さいました諸先生方、調査にご協力下さいました大学生の皆様にご心よりお礼申し上げます。

文献

- 1) Arieti, S. & Bemporad, J. (1978). *Severe and mild depression : the psychotherapeutic approach*. Basic Books inc., New York
(水上忠臣・横山和子・平井富雄 (訳) (1989). うつ病の心理 精神療法的アプローチ)
- 2) 衛藤理砂・岡村志津英・宮城和子(2010). 病気を生きぬく② <医師><看護師><患者・家族>によるうつ病の本 岩波書店
- 3) 福田一彦・小林重雄(1973). 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌, 75, 673-679.
- 4) 平木典子(2009). 改訂版 アサーション・トレーニング—さわやかな自己表現のために— 日本・精神技術研究所
- 5) 金築智美・金築優・根建金男(2008). 大学生の怒り特性の変容に及ぼす認知行動療法の有効性—怒りの対処スタイルの個人差を考慮した認知的技法を用いて— 教育心理学研究, 56, 193-205.
- 6) 厚生労働省(2010). 気分障害患者数の推移 厚生労働省 政策レポート 自殺・うつ病等対策プロジェクトチームとりまとめについて
<<http://www.mhlw.go.jp/seisaku/2010/07/03.html>>(2012年8月15日閲覧)
- 7) Moreno, J. K. , Selby, M. J. , Fuhiman, A. , & Laver, G. D. (1994). Hostility in depression. *Psychological Reports*, 75, 1391-1401.
- 8) 大淵憲一(1999). 攻撃/攻撃性 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁耕算男・立花政夫・箱田裕司(編) 心理学辞典 有斐閣 pp.243-244.
- 9) Painury, N. , Sharan, P. & Matto, S. K. (2005). Relationship of anger and anger attacks with depression: A brief review. *European archives of psychiatry and clinical neuroscience*, 255, 215-222.
- 10) Riley, W. , Treiber, F. A. , & Woods, M. G. (1989). Anger and hostility in depression. *Journal of Nervous and Mental Disease*, 177, 668-674.
- 11) 坂本真士・大野裕(2005). 第1章 抑うつとは 坂本真士・丹野義彦・大野裕(著) 抑うつの臨床心理学 東京大学出版会, 7-28.
- 12) Spielberger, C. D., Krasner, S. S., & Solomon, E. P. (1988). The experience, expression, and control of anger. In M. P. Janisse (Ed.), *Individual differences, stress, and*

Received
August 20, 2012

Accepted
October 26, 2012

Published
October 31, 2012

- health psychology* (pp. 89-108).New York : Springer-Verlag.
- 13) 鈴木平・春木豊(1994). 怒りと循環器系疾患の関連性の検討 健康心理学研究,7,1-13.
 - 14) 鈴木常元・安斎順子(1999). 抑うつ者の外面的および内面的攻撃性 心理臨床学研究, 16, 573-581.
 - 15) 上野真弓・丹野義彦・石垣琢磨(2009). 大学生の持つ抑うつ傾向と攻撃性との関連—攻撃性の4つの下位尺度を踏まえて パーソナリティ研究, 18, 71-73.
 - 16) 山崎勝之・坂井明子・曾我祥子・大芦治・島井哲志・大竹恵子(2001). 小学生用攻撃性質問紙(HAQ-C)の下位尺度の再構成と攻撃性概念の構築 鳴門教育大学研究紀要教育科学編, 16, 1-10.
 - 17) 湯川進太郎(2008). 怒りの心理学—怒りとうまくつきあうための理論と方法—有斐閣

Received
August 20,2012

Accepted
October 26,2012

Published
October 31,2012

CONTENTS

REVIEW ARTICLES

- How Did 'Difficult to Involve' Parents Emerge in Early Childhood Care and Education?
-A Discussion of Research Trends on Family Support and Relationship with Guardians..... **Tetsuji KAMIYA** • 1
- The Review of the Studies on the Fall Prevention Exercise Programs for Elderly Persons..... **Jaejong BYUN** • 16
- Current issues in driver's license of people with intellectual disabilities..... **Atsushi TANAKA** • 32

ORIGINAL ARTICLES

- The Changing Characteristics of In-home Care Service Providers in the U.S. and in the
UK: Implications for South Korea **Yongdeug KIM, et al.** • 38
- Assessing Training System for Social Service Workers in South
Korea: Issues and Policy Agenda **Jaewon LEE, et al.** • 60
- Relationship between depression and anger **Noriko MITSUHASHI, et al.** • 77
- Workaholism Determinant Variables of Social Workers and Care Workers
in Senior Welfare Centers in Korea **Jungdon KWON, et al.** • 87
- The Exploration of Financial Resources of Financial Adjustment System
and Social Welfare in Japan **Haejin KWON, et al.** • 105
- Relation between the importance of school education and after-school activity programs
and age, sex, and school type for school-aged children with disabilities..... **Hideyuki OKUZUMI, et al.** • 131
- A Study on the Vitalization of Silver Industry by Analyzing the Needs of Silver
Industry in the Daejeon, South Korea **Gowhan JIN** • 138
- A Comparative study on Factor Analysis of the Disabled Employment between
Japan and Korea **Moonjung KIM, et al.** • 153
- Relationship between Teacher Mental Health that Involved
in Special Needs Education and Sence of Coherence **Kohei MORI, et al.** • 167

SHORT PAPERS

- The Analysis of Disaster Mitigation System and Research on
Disaster Rehabilitation. **Keiko KITAGAWA, et al.** • 177
- The Trend of International Research on University Learning Outcome and
Quality of Life and Mental Health of University Students
..... **Changwan HAN, et al.** • 189
- The research trend and issue of hospital school in the education for the health impaired
..... **Aiko KOHARA, et al.** • 198
- Bibliographical consideration about the current situation and the problem to be solved
about cooperation between teachers in hospital classrooms and other staffs..... **Remi KAKUTANI, et al.** • 208
- The Current Status and Issues in Korean Barrier-Free General School
..... **Eunae LEE, et al.** • 219

CASE REPORT

- Approach for the problematic behaviors of autism complicated with severe and multiple disabilities
~ a case study of a first year junior high school student in daily living ~
..... **Kazumi SUGIO, et al.** • 229